

平成 23 年度 府立教育センター附属高等学校 評価報告書

1 めざす学校像

- (1) 自己を発見する学校 (2) 真理を探求する学校
 (3) 感動を分かち合える学校 (4) 自信を育む学校

2 学校教育自己診断における結果と分析・学校協議会における提言内容

学校教育自己診断の結果と分析 [平成23年12月 実施分]	学校協議会における提言内容
<p>【学習指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度は「新たな学びの創造」と「学びに向かう意欲を高める」を目標に学力の向上をめざした。「PISA型学力」「ICT」「コラボ」をキーワードに各教科で積極的に取り組んだ。授業について理解しやすいように様々な工夫をしているかという問いに対する肯定的な回答は67%であった。特に本校の核である「探究ナビ」については70%の生徒は「大いに満足している」と回答している。自宅学習時間が1時間未満の生徒が70%近いという現実から、今後家庭学習をいかに定着させるかが大きな課題である。 <p>【生徒指導等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「生徒の多面的な総合支援」の充実に取り組んだ。先生は親身になって話を聞いてくれますか」という問いに対して肯定的に回答した生徒が60%であった。昨年は52%だったので8%増加した。スクールカウンセラーの活用や生徒相談だよりの発行など教育相談に関する取り組みの充実とともに、教職員研修の充実の成果である。何より生徒一人ひとりを大切にしたい生徒との関わりの積み重ねが、確かな信頼関係に結びついていると考えている。 ・保護者からの「学校は保護者の願いや期待に的確に答えているか」という問いに対して肯定的に答えた保護者は昨年度は68.8%であったが、今年度は72%と着実に上昇している。学校全体で家庭との連携に積極的に取り組んだ成果である。 <p>【学校運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・働きやすい職場環境であると回答した教員が60%であることを見て自己の能力を発揮し教師としても満足感を持っているといえる。 ・職員研修については実施回数、参加率、内容の充実度全て昨年より上回っている。 <p>【全体】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「入学してよかった」と「強く思う」生徒が48%と高い数字表れたことが学校としての何よりの成果である。 	<p>第1回 (7/22)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「ボリュームゾーンの生徒に対していかにして学ぶ意欲を高めるのか」という課題に対しての新しい試みは大いに評価できる。今後大学進学にどうつなげていくかが大きな課題。 ○多様な生徒が入学しているようだが、習熟度別授業などで全ての生徒が自己有用感を持つよう育ててほしい。 ○「授業研究」の取り組みには大いに共感を持った。中学校との連携も授業を中心した取り組みもお願いしたい。互いが理解しあえる場となるような協同の授業研究会など検討したい。 ○学校の一つの成果として進学実績ということがある。予備校・塾の活用も検討いただきたい。 <p>第2回 (1/24)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒アンケートの集計結果について <ul style="list-style-type: none"> ・全体として生徒からの評価が昨年度よりも大幅に向上しているのは評価できる。アンケート結果の分析から学校の弱みを的確に把握し、工夫・改善にもってほしい。 ○外部からの学校評価 <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業、研究授業などで学校の様子が具体的に見ることができるといって大きな発信となっている。 ・3回のオープンスクール、2回の学校説明会も中学生、保護者にとって好評であったとのことで、今後もさらに充実させてほしい。 ・「学校アセスメントシート」の提出を求めた。結果は総じて「よくできている」という評価を頂いた。

3 本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
取組み①	○新たな学びの創造 ー探究力（PISA型学力）の育成	○全教科・科目においてPISA型学力の育成に努めるために探究力育成委員会を発足した。（年間4回） ○少人数・習熟度別学習（数学、英語）を実施し、学びへ向かう意欲を高めた。 ○教育センターとの一体化に向けて、指導主事との協働を推進した。特に「授業研究」という言葉を定着させることに努め、授業づくりを中心に連携を深めた。 ○「探究ナビ」の授業において、人間関係・集団づくりワークショップやプロジェクト型学習を実施した。 ○教育Cの施設設備、スタッフを活用した特別授業を1学期、2学期にそれぞれ実施した。また、JAXA、府大、JICA、NTTドコモ、プロの劇団員と連携した授業の開発にも取り組んだ。	○5月の保護者への公開授業、7月の中学校への公開授業、11月の府立学校への公開授業、2月の探求ナビ発表会と年間行事に組み込み計画的に実施できた。生徒の積極的な学習状況を実際に見てもらうことによって、それぞれにおいて新校に対する不安の払拭ができた。 ○「授業研究」という新しい風を起こし、自主的な教科指導研究会や、学習会、相互授業見学会など新しい取り組みができた。 ○教育センターとの一体化については連携が深まりつつあるが、相互に遠慮や生徒認識についてのずれがあり今後の課題として継続的に取り組んでいきたい。 ○「探究ナビ」については、授業づくりに週に1回の教育Cとの打ち合わせなど時間をかけた準備によって、70%以上の生徒が探求ナビの授業を肯定的に捉えるという大きな成果を生み出す授業となった。
取組み②	○信頼と笑顔あふれる学校づくり ー生徒支援体制の構築	○生徒指導の在り方に「生徒とかわかること」を中心に置き、面倒見の良い学校をめざした。 ○経験の浅い教員を中心に「保護者対応学習会」を実施し、保護者の期待や願いを念頭に置いた誠実な対応についてスキルアップを図った。 ○大阪府立大学との連携講座を2回実施した。（エイズ、命） ○適応指導教室、教育相談指導教諭、スクールカウンセラーの強固な連携を構築するために、定期的な連絡会を実施し、学年主任、当該担任を交えたケース会議も年間6回実施した。	○現時点での中途退学者はゼロであることから大きく評価できる。 ○保護者アンケートの結果から「学校は保護者の期待や願いに答えている」と肯定的な回答が72%に増加した。 ○先生は悩みを親身になって聞いてくれるか問い質に60%の肯定的な回答があった。今後さらに教員との信頼関係を結んでいくことに学校全体を挙げて取り組んでいきたい。
取組み③	○研究と発信 ーナビゲーションスクールとしての機能の整備と新たな伝統の創造	○「授業研究」やその発信 ・公開授業年間4回 ・授業研究会 全体では年間4回 教科別等は学期に2回 ・地域との合同研究会 英語科で実施 ・学校HPや府教委ニュース、教育センターニュースなどを活用し頻繁に発信した。 ・読売、朝日、毎日など新聞にも取り上げられ、「PISA型学力」の育成をめざした学校としてマスコミを通して発信した。 ○部活動のさらなる活性化 ・加入率を限りなく100%に近づけることはできなかったが、70%の生徒が入部した。	○7月の中学校に対する公開授業には80校近くの参加を頂き、その注目度を再認識するとともに、実際に見学して「安心した」という声を多く聞いた。 ○教育センターが開発したST分析を活用した授業研究やデジタルボードの活用学習会、生徒相談委員会主催の学習会など自主、自律的な学習会が活発に行われるようになった。月に一回は何かの学習会が開かれているという学校になった。 ○「探求ナビ」の授業で実施した「ホームカミング」の取り組み（里帰り企画）が中学校には高い評価を得た。 ○部活動への加入率の向上が「アルバイトをしていない生徒の増加」に結果として結び付いた。